

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	李裕淑
論文題目	変容するチェサ (祭祀) と女性-在日コリアンの戦後精神史		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、在日コリアンの世代交替が進む中で、チェサ (祭祀) という儒教式先祖崇拜の伝統的な儀礼の実践・認識がどのように変容し、継承されてきたのかについて分析したものである。在日コリアンのアイデンティティや共同体との関係、儒教的世界観の変容、さらにそれらをジェンダーの視点からとらえることを目的として、女性への聞き取り調査を行い、これまで歴史の表舞台に出る機会がなかった声を記録した。</p> <p>第1章では、祖先祭祀と民族アイデンティティとの関係や祭祀の変容に関する先行研究を中心に、整理・分析した。</p> <p>第2章では、研究対象の中心をなす在日コリアンおよびチェサに関する歴史的概要とチェサに関する学術的定義について整理した。在日コリアンの場合、1世たちは儒教的な死生観と結びついた観念としての孝を重視し、祖霊や鬼神に対する畏敬の念を抱いていたと理解することができる。だがインタビューなどを通じて、2世やその次の世代は儒教的な死生観を持っているとはいえない状況であることが明らかとなった。</p> <p>第3章では、在日コリアンにとって、社会的関係の維持・再生産におけるチェサの機能とはいかなるものであるのかを、民族団体の活動や儀礼形式の変容を含めて動的に分析・考察した。在日コリアンの結束は民族団体の維持発展に一役買うという相互互助関係を見ることができるが、だからこそ、それを民族学校や民族団体は積極的に支えてきた。具体的には、チェサの手引書の発刊やビデオ制作、冠婚葬祭を積極的に民族団体傘下の支部が手伝える活動をしてきたことを指し、これらの活動について分析を行った。</p> <p>第4章および第5章では、韓国人の精神世界を理解するうえで必須である「ハン (恨)」、およびハンとチェサの関係について考察を進めた。在日コリアンは朝鮮半島の歴史的悲劇の影響を被るだけではなく、異国での生活のストレスを抱えながら生きてきた。特に在日コリアン女性の1世や戦前に生まれ1世と同じ環境にいた1世半と呼ぶしかない世代、さらに、1世の影響を強く受けた2世などは、儒教的な家父長制度の影響が強い家庭環境で育ち、ハンを抱えていたと考えられる。その「ハン」の概念の議論を考察した。</p> <p>第5章では、その「ハン」概念を手掛かりに、在日コリアンの死生観や儒教的世界観の様相を明らかにした。韓国では伝統的に、祭祀を行ってもらえない霊は「ハン」を持ち崇ると考えられていたため、家族の平穏と幸福を願う女性たちは、儒教的な祭祀で祀ることができない死霊のハンを少しでも解いて死霊を慰撫するために、シャーマンに頼った。しかし、本章で分析した在日コリアン女性たちは、儒教理念から外れてはいるがチェサを行うことにより、女性であるがゆえにチェサの主体となれない自分のハンと、祀ってもらえない霊のハンを解くことによって、自分や家族の日常の幸福をも願っていた。</p>			

第6章では儒教的祭祀におけるジェンダー問題について検討した。女性のなかには、チェサの継承を望む人もいれば、望まない人がいるなど、チェサに対する考えは年齢とその立場によって異なることが明らかとなった。こうした差異は、チェサの実施や継承に対して、女性や個人の意思が強く反映されるようになったと捉えることができるが、それはつまり、在日コリアンコミュニティの希薄化や日本社会への順化、さらには核家族化、少子化といった社会的環境の変化が、家のタテ・ヨコの関係（血縁的・地縁的關係）の希薄化を促し、伝統的民族儀礼、民族アイデンティティの生産・再生産の場であるチェサの維持・継承に影響を及ぼしていることを示しているといえる。

第7章では在日コリアン社会を取りまく変化とともに、在日コリアン女性のチェサに対する意識変化とチェサの変容との関係を検討した。チェサの慣習も1世が行ってきた形を守るより、自分たちのライフスタイルに合わせればよいと考えていく傾向がみられた。

第8章では、このようなチェサの日本化の一端を示す日本の仏教的儀礼文化に注目し、日本の先祖崇拜における仏教的世界観と、チェサが本来備えていた儒教的世界観との絡み合いから生じた文化変容に関して分析した。具体的には、チェサの多様化の一環として、一部の在日コリアンが仏壇の前にチェサの膳を供えながら伝統的なチェサを執り行うことから、この仏壇とチェサの併祀に注目した。仏壇を自宅に備えるようになって、在日コリアンにとって、仏教と儒教の混合という認識はない。儒教的なチェサを仏壇購入以前と同じように行いながらも、仏壇という位牌の安置場所を得たことで、仏壇という目に見える形で祖先を祀っているにすぎず、その前に座れば日常的に祖霊と交信ができる場を確保したと考えていることがわかった。

第9章では、本来のチェサでの供物である祭需（チェス）では見られない供花に着目し、チェサの日本化における仏教的影響について考察を試みた。元来、死者に花を供える行為は仏教的なものであるが、日本における葬儀の主流が仏教式であることも、在日コリアンの供花行為に影響していると考えられる。在日コリアンは日本の葬送文化を日常的に目にしている。日本の仏教的な葬儀にも接するようになり、生花祭壇なども目にし、焼香、拝礼もすることとなった。チェサにおける供花は、日本社会における供花をめぐる変化や、日本の仏教的葬儀の影響、日本の葬儀屋の利用、そして在日コリアンコミュニティ自体の変容などによって生じた変容といえる。

最後に、第10章では、9章までの成果を踏まえつつ、儒教的祭祀を守ってきた在日コリアン1世が退場していなくなる在日コリアン社会でのチェサの機能と変容について考察し、今後の展望の提示を試みた。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、在日コリアンの世代交替が進む中で、儒教的な先祖崇拜の儀式であるチェサ(祭祀)がどのように変容し、継承されてきたのかに関して、在日コリアン女性の聞き取り調査を行い、歴史の表舞台に出る機会のなかった声を記録・分析したものである。調査の結果、チェサの歴史的意義の変化、それと表裏一体となったエスニック・アイデンティティの変化を明確に記録することに成功した。

110年以上になる在日コリアンの歴史の中で、チェサの時空間は血の繋がった祖先と共に過ごす場であり、したがって故郷と繋がった場、また生きている血族が集まる場、集団的アイデンティティを再認識する場、子孫に血筋を確認させる場、さらに儒教的な年功序列や孝の思想や秩序の教育の場であった。そして、良くも悪くも、家族が結束して、アイデンティティを強固にすることができる場であった。チェサは、朝鮮半島に眠る祖先との紐帯を再確認し、日本社会の差別や偏見に立ち向かう矜持を保ち、在日コミュニティのネットワークを維持する核ともいべきものであった。

このチェサが変化していくうえで特筆すべきなのは、女性の意識の変化である。父系親族の秩序と団結の維持を目的とするチェサにおいて、主体は男性である。女性の役割はそれを準備したり、チェサを継承する息子を産み、次世代に継承することであった。儒教的チェサでは女性は男性と同等とはみなされず、その儀礼の場からは外されていた。これに抗するように、女性たちは自分たちのハン(恨)を解くために、またチェサで祀ることのできない「主なき祖先」を慰めるため、本来の儒教理念から外れたチェサを執り行うことで、「主なき祖先」のハンを解くと同時に、自分や家族の日常の幸福を祈願してきた。論文では、その文化変容を克明に記録した。

本論文のすぐれた点は、実際にチェサを支えてきた女性たちの声を数多く聞いたことに尽きる。チェサが男尊女卑的な家父長制を基盤としているうえに、ソニア・リャンが指摘するように、そうした生活史において女性の声自体が聞かれることがなかった。それゆえに本論文では、女性の立場からのチェサに対する記憶や認識を聞き取ることが価値あるものであると考え、女性への聞き取りを中心に記録・分析した。チェサを一生懸命に準備し、チェサを継ぐ息子を産み、次の世代に継続させるのが良い嫁であり良い母である、というヘゲモニー的言説を前に、女性の声、生活史は表に出ることがなかった。そうした彼女たちの声を掬い上げ、植民地主義的、男性中心的歴史の叙述だけでは埋められない、在日コリアンの精神史の空白部分の一端を解明した。その意味で価値がある論文であるといえる。

現在はチェサの儀礼をどう行うかは実質的にチェサ儀礼を支えてきた女性たちの意見が主導している。簡略化や簡素化が進んだだけでなく、今やその維持・継承の決定を下し、次世代の息子たちにチェサを継がさないという女性も増加していることを明らかにした。女性たちがチェサの変容や継続について考え始めたのは、チェサが男尊女卑的性格を有しており、女性にかかる負担が大きく、辛かったからという理由だけではない。日本社会での定住が自明となり、国際結婚も増え、日本国籍者が増えるなど、在日コリアンのアイデンティティは複雑で多様化している。2世は、朝鮮民族へ

の帰属意識が濃厚だった1世に育てられてその影響も強かったが、3世、4世以降の世代は朝鮮民族に自らを一体化するようなアイデンティティを持つ場合は少ない。今や高齢化した2世さえも、少なくない人が、従来のチェサは時代に合わなくなっていることを感じている。儒教的な死生観を持たず、家父長的秩序を受け継ぐつもりもない次世代の在日コリアンに、チェサを今の形のままに引き継がせることに疑問を感じ、さらには否定的なのである。

特にチェサの日本化、仏教的儀礼文化化に注目して詳細な調査をした第8章、第9章は、先行研究がまったくない分野だけに、公聴会の審査においても高く評価された。チェサと仏壇の併祀は在日コリアンが戦略的に選び取った日本的葬祭文化を取り入れたハイブリッドな祀りの形である。在日コリアンにとって日本は祖国ではないが異国でもなく、客体でもなく、しかしながら一体化できるものでもない。しかし、在日コリアンは地域住民として潜在化している姿がチェサと仏壇の併祀からもみてとれる。自分たちの生活環境に合わせて、チェサもまた戦略的に変容させながら、まさに在日文化の一つとして継承されていくのだろうと考えられる。

以上のように、本論文は、在日コリアンのチェサを通して、変化するマイノリティの文化の様態をつぶさに記録した研究成果であり、東アジア思想の混淆様態に関する方法論的な発展を成功させた優れた研究成果であると評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年10月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降